

勝海舟顕彰会

海舟の足跡

勝海舟年譜

		年 齢				
年 次	西 暦	(数え 年)	月 日	海 舟	事 項	
文政 六	一八二 三	一	正月晦日		江戸本所亀沢町の男谷邸に生まれる。父は勝小吉、母は信子。幼名・通称麟太郎。	
文政 十二	一八二 九	七	このころ		十二代将軍家慶の五男初之丞に召されたという（九歳または十二歳まで）。	
天保 九	一八三 八	十六	七月二七日		父小吉隠居し（号夢酔）、家督を相続。諱（本名）は義邦。	
			このころ		島田虎之助に入門して剣術修業を始める。	
弘化 二	一八四 五	二三	九月		岡野孫一郎の養女民子と結婚。	
			このころ		永井青崖に蘭学を学ぶ。	
弘化 三	一八四 六	二四	春		本所から赤坂田町に転居。	
弘化 四	一八四 七	二五	秋		「ゾーフハルマ」を筆写開始（翌嘉永元年八月二日完了）。	
嘉永 三	一八五 十	二八	九月四日		父小吉死去（四九歳）。	
			この年		赤坂田町に私塾を開き蘭学と西洋兵学を教授。	
嘉永 五	一八五 二	三十	十一月		妹順子、佐久間象山と結婚。	
			この年		諸藩の依頼を受け鉄砲・大砲を鑄造。	

嘉永 六	一八五 三	三一	七月	「海防意見書」を二通提出。
安政 二	一八五 五	三三	正月十九 日	大久保一翁の推挙で、蕃書翻訳勤務を命 じられる。
			七月二九 日	長崎海軍伝習を命じられる。
			八月七日	小普請組から小十人組となる。
			九月一日	長崎に向かう（十月二十日長崎着）。
安政 三	一八五 六	三四	三月十一 日	講武所砲術師範役となる。
			六月晦日	海軍伝習の功により大番に番替えとな る。
安政 五	一八五 八	三六	二月より	咸臨丸で下関・五島・対馬・鹿児島など を巡航。
			三月・五 月	鹿児島で島津斉彬に謁する。
安政 六	一八五 九	三七	正月十五 日	長崎の伝習を終え、江戸帰府。
			七月	赤坂氷川町に転居。
			十一月二 四日	アメリカ派遣を命じられる。
万延 元	一八六 十	三八	正月十三 日	咸臨丸で品川沖を出航、アメリカに向か う。
			二月二五 日	サンフランシスコ到着。
			(和暦)	
			閏三月十 八日	サンフランシスコを出航、帰国の途につ く。
			(和暦)	
			五月五日	浦賀に帰港。
			五月七日	江戸に帰る。
			六月二四 日	蕃書調所頭取介となる。
文久 元	一八六 一	三九	九月五日	講武所砲術師範役となる。
文久	一八六			

二	二	四十	七月四日	軍艦操練所頭取となる。
			閏八月十日	軍艦奉行並になる。
			七日	
			一二月十日	老中小笠原長行に従い順動丸で大阪出張
			七日	(文久三年正月十六日帰府)。
			このころ	坂本龍馬、海舟の門下生となる。
文久	一八六	四一	四月二三日	將軍家茂の摂津湾巡覧を案内、家茂から
三	三		日	直接神戸海軍操練所設立の許可を得る。
			十二月二日	再上洛する將軍家茂を奉じて海路で大阪
			八日	へ向かう(元治元年正月八日大阪着)。
元治	一八六	四二	二月五日	一橋慶喜より、長崎派遣を命じられる
元	四			(四月十二日大阪帰還)。
			五月十四日	軍艦奉行となり、従五位下安房守に叙せ
			日	られる。
			五月二十九日	神戸海軍操練所設置布達。
			十一月十日	軍艦奉行罷免、寄合となる(慶応元年三月九日神戸海軍操練所廃止)。
慶応	一八六	四四	五月二八日	軍艦奉行再勤を命じられる。
二	六		八月十五日	一橋慶喜より長州藩との休戦と徴兵を調
			日	停する密命を受ける。
			九月二日	安芸宮島で長州藩広沢真臣らと会談、休
				戦を協定(これより先長州藩に停戦と解
				兵の勅令が出され、交渉を困難にする)。
			十月五日	大坂を発ち帰府。以後自ら職務を行わ
				ず、書見と詩に遊ぶことを表明。
慶応	一八六	四五	三月五日	海軍伝習掛を命じられる。
三	七		七月二五日	長男小鹿米国留学出発。
			日	
慶応	一八六	四六	正月十七日	海軍奉行並となる。
四	八		日	
(明治			正月二三日	陸軍総裁となる。

元)			日	
			二月二五	陸軍総裁を免じ、軍事取扱を命じられ
			日	る。
			三月十三	薩摩藩邸にて西郷隆盛と会見。
			日	
			三月十四	田町にて再び西郷と会見、江戸無血開城
			日	を決める（四月十一日江戸城引き渡し終
				了）。
			十月十一	蒸気船で東京を離れ駿府に向かう（十二
			日	日着）。
明治二	一八六 九	四七	七月十三	安房守を安芳と改める。のちに安芳を本
			日	名とする。
			七月十八	外務大丞に任ぜられる（八月十三日辞退
			日	免職）。
			十一月二	兵部大丞に任ぜられる（翌年六月十二日
			三日	辞退免職）。
明治三	一八七 十	四八	三月二五	母信子、静岡で没。
			日	
明治五	一八七 二	五十	五月十日	海軍大輔となる。
			八月	静岡より帰京、赤坂氷川に居す。
明治六	一八七 三	五一	三月三日	島津久光慰撫のため、鹿児島へ派遣の命
				を受ける。
			五月二五	大黒屋六兵衛より徳川家達に金子三万両
			日	を献金せしめ、これを元手に旧幕臣を対
				象とした金融を行う。
			十月二五	参議兼海軍卿となる。
			日	
明治七	一八七 四	五二	七月三十	台湾問題につき太政大臣三条実美に意見
			日	を述べる。
明治八	一八七 五	五三	四月二五	元老院議官に任命されるが、ただちに辞
			日	表提出（十一月二八日に承認）。
明治十	一八七 七	五五	十二月二	長男小鹿帰国。
			二日	
				西南戦争で薩摩軍への資金援助疑惑で東
				京警視本署（のちの警視庁）第三課より

明治十 一	一八七 八	五六	三月二 一 日	代人を通して尋問を受ける（数次にわたり弁明書提出）。
明治十 二	一八七 九	五七	七月三十 日	木下川浄光寺境内に西郷隆盛追悼の碑を建立。
明治十 三	一八八 十	五八	二月二五 日	保晃会設立に着手。
明治十 六	一八八 三	六一	この年	吉井友実・税所篤らと西郷隆盛の名誉回復運動始める（明治十七年四月二五日遺児寅太郎の参内で西郷隆盛の名誉回復）。
明治二 十	一八八 七	六五	五月九日	伯爵となり、華族に列す。
			十二月	『吹塵録』『吹塵余録』成る。
明治二 一	一八八 八	六六	四月三十 日	枢密顧問官となる。
			この年	『海軍歴史』成る。
明治二 二	一八八 九	六七	十二月	『陸軍歴史』成る。
明治二 三	一八九 十	六八	七月十日	貴族院の伯爵議員に互選されたが辞退。
			十二月	洗足池畔の土地を購入。
明治二 四	一八九 一	六九	七月九日	清国提督丁汝昌来訪。
			この年	『開国起源』成る。
明治二 五	一八九 二	七十	二月七日	長男小鹿病死（四一歳）。二月徳川慶喜の十男精を養子にすることを内定。
明治二 六	一八九 三	七一	十一月	条約改正問題につき意見を徳川・島津家等へ送る。
明治二 七	一八九 四	七二	六月三日	日光に遊ぶ（六日帰京）。
			七月十六 日	日清両国の衝突につながる朝鮮出兵に反対する意見書を起章。
明治二 八	一八九 五	七三	五月二一 日	朝鮮処分等につき意見書を起章。
明治三	一八九			徳川慶喜参内して天皇・皇后に拝謁し、

一 八 七六 三月二日 名誉回復。

慶喜、海舟宅を訪れ名誉回復の謝意を表
三月三日 す。

六月二九 田中正造来訪、地獄か極楽で総理大臣と
日 いう証文を書く。

一二月 清国より亡命の康有為に、日本の力を頼
りにするなという書を送る。

明治三 一八九 七七 一月十九 自邸で死去（発喪は二一日）。
二 九

一月二五 青山墓地で葬儀。洗足池畔に葬る。
日

江戸東京博物館「没後百年勝海舟展」より転載